

霧島ジオパーク 2010/11/21 南日本新聞

霧島連山が日本ジオパークに認定され2ヵ月余りになる。鹿児島、宮崎両県にまたがる7市町が2年越しで取り組んだ成果で、内容を充実させようという動きが目につき始めた。「霧島ジオパーク」の認知度を高め、自治体間の連携を密にしながら、世界認定を視野に入れる連山の可能性を探った。（霧島総局・中野督子）

10月半ばの日曜日、快晴の韓国岳山頂（標高1700メートル）は両県から集まった80人を超える登山客で埋まった。日本ジオパーク認定を記念し、霧島ネイチャーガイドクラブ（事務局・小林市）が初めて企画した登山会。古園俊男会長（63）が「ここまで関心が高いとは。参加者は予想の倍」と驚く盛況ぶりだった。

連山最高峰の眺めを満喫する登山者に、鹿児島大学大学院理工学研究科の井村隆介准教授（46）が「大地の成り立ちを学べる公園がジオパーク」などと説明。「研修を受けたジオガイドから火山、地質、植生について聞けるのがジオツアー。何度でも足を運んで」と語りかけた。

都城市都原町の池田より子さん（61）は「これまでの登山と違い、火山の成り立ちなどを知ることができた。山登りの新たな楽しみ方を知った気分」と笑顔をみせた。登山、下山時は参加者を10人程度に分け、同クラブ会員が案内した。会員そろいのポロシャツの胸には、霧島ジオパークのロゴマークが誇らしげにあしらわれていた。



ジオパークは直訳すると大地の公園。「世界遺産の地質版」と呼ばれ、一帯の保存に加え、教育や観光、地域振興での「活用」が求められる。

霧島ジオパークのエリアは、両県にわたる環霧島地域5市2町のうち、JR日豊線、肥薩線、吉都線で囲まれた約8万2千ヘクタールで、ジオサイト（地質的な見どころ）に加久藤火砕流を成因とする5ヵ所を含む。

7市町でつくる環霧島会議が母体の霧島ジオパーク推進連絡協議会を中心に2010年4月、連山の日本ジオパーク認定を申請。9月14日に認められた。

霧島の魅力を再発見し、新しい意味を加える好機到来に、環霧島地域ではさまざまな取り組みが目立つようになった。霧島市牧園の霧島ホテルは認定後すぐ、霧島ジオパークを解説するコーナーを設けた。連山の立体マップや写真、新聞記事が並ぶ。

霧島市観光協会は10月末に勉強会を初開催、霧島市や都城市から観光業者ら約70人が参加した。講師陣はジオパークについて一から教える一方、PRや機運づくりのためロゴマークの積極活用を促した。

会に参加した同ホテルの福富龍一支配人（62）は早速、解説コーナーにロゴマークを加えた。「マークのあるなしで重みが全く違う。お客さまにここで霧島の素晴らしさを知ってもらい、世界ジオパーク入りにつなげたい」と力を込めた。